

川端康成に影響を与えた茨木中学校の教師たち

宮崎 尚子

The Teachers of Ibaraki Junior High School Who Had an Influence on
Kawabata Yasunari

はじめに

本論では、日本人初のノーベル文学賞受賞作家である川端康成が作家となる道程で大阪府立茨木中学校の教師たちが大きく関わっていたことを述べる。

川端は作家として文壇に登場する前に一度、中学生時代の作文が雑誌に掲載されている。それは「生徒の肩に柩をのせて」という作文で、石丸梧平が主宰する雑誌「団欒」の大正六年三月号に掲載された。内容は急死した恩師倉崎仁一郎の葬儀の様子を描いたものである。生徒たちが柩を担いだ写真が巻頭に掲載された。当時の「団欒」は与謝野晶子や斎藤茂吉など、名だたる著名人が投稿する新しいタイプの文芸・家庭雑誌であった。柩は双葉より芳し¹で、後のノーベル文学賞受賞作家なら何の不思議もないが、実はこの頃の川端の作文の成績は五十三点とほぼ最下位であった。(学年の平均は八十点) 小学校の頃の作文は絶賛されていたが、中学校では低迷していたようだ。そんな川端の文章が大拔擢された理由については、「生徒の肩に柩をのせて」の現物が未発見だったこともありさほど重要視されてこなかった。平成二十三年に著者がこれを発見し、関係資料から川端の作家としての

原点に大きく関わっていることが分かった。

中学時代の川端は来日したタゴールの影響もあり、早くからノーベル文学賞を目指して習作を新聞等に投稿していた。その割に作文の成績が芳しくなかったのは一つには提出物を怠っていたこと(中学三年の成績表の裏に「日誌を怠る」と記述されている)、もう一つには時流に沿わない内容だったからのようだ。それが倉崎先生の死を題材にして、人が感動する内容のものを書いて大絶賛された。この時期から心の琴線に触れるようなもの、つまり文字通り画竜点睛を悟り文章を書くようになったようなのである。人が感動する文章の極意を獲得したのか、翌年の日記には「八十五点ある。クラスの最高点らしい」とある。その後は周知の通り作家としての道を歩みだすのである。中学時代に文章に対してこのような挫折があったことは知られていない。

雑誌掲載されたのは当時寄宿舎の舎監であった国漢の教師満井成吉が石丸梧平に推挙したからである。この満井も茨木中学校の出身である。石丸梧平も茨木中学校所縁の人間である。彼等の存在が無ければ雑誌掲載は実現しなかったし、川端の文章に対する自信が回復することも無かった。

また、この題材となった生徒葬が実現したのも茨木中学校の生徒や教師たち、卒業生たちが尽力したという背景がある。倉崎仁一郎の死後、授業時間を学年級会として提供したのは体育教師杉本傳(つたえ)であった。その学年級会で五年生たちは倉崎仁一郎の柩を担ぐことを決める。日本初のプール造営にも関わっていた生徒たちで、常日頃力

を合わせていたから一致団結することは自然な流れだったのだろう。杉本はその決定に敬意を表しながら実現のために加藤逢吉校長や同窓会の久敬会と調整を進める。加藤校長も学校を一つの家族と考えていた指導者だったので喜んで間に立っている。勤続二十八年の倉崎の葬儀には多くの弔問客が見込まれた。檀家である本源寺（臨済宗妙心寺派）では手狭なので、茨木別院（真宗大谷派）の会場が提供された。宗派が違うが、これも同窓会の尽力で実現したようだ。恩師の棺を担ぐ生徒たちの葬列は当時の人々の語り草になった²。

『茨木高校百年史』（大阪府立茨木高等学校 校史編纂委員会 ぎょうせい 平成七年十一月）によるとこの時期の茨木中学校には生徒日誌という指導があったことが分かっている。これら生徒日誌の中から抜粋された作文が追悼号に十人分掲載されている。全て席次が上位の生徒たちであり、川端は入っていない。この十人には漏れたが、寄宿舎で舎監の満井の目に留まったのだ。そういった意味では、この生徒日誌の指導があったお陰で日を見た文章とも言える。

以上の事情から、作家誕生の陰には当時の教師たちや久敬会の尽力があったことが分かった。以下、「生徒の肩に柩をのせて」に関することと教師陣について紹介する。また、川端が同窓会に寄稿した「師の柩を肩にした者」（久敬会「会報」昭和七年十二月号）についても新たに現物を発見したので紹介する。

一、恩師倉崎先生の葬式

・「生徒の肩に柩をのせて」

川端康成は「倉木先生の葬式」（「キング」昭和二年三月）、「師の棺を肩に」（「東光少年」昭和二十四年六月）と、倉崎仁一郎の葬儀を題

材にした作品を書いている。いずれも全集に所収されているがそれに先立つ「生徒の肩に柩をのせて」は発見されていなかった。川端は「師の柩を肩にして」として大正五年に掲載されたと記憶している。これまで「倉木先生の葬式」も「師の棺を肩に」も特に注目された作品ではなかった。大阪府立茨木高等学校が所蔵する茨木中学校の資料によると倉崎の死亡は大正六年一月末とある。当時大阪毎日新聞の大正六年一月三十一日の死亡記事によると「廿九日午前四時腦溢血にて卒去」、「同行卒業生より成る久敬会にては三十一日午後三時同会の会葬として莊嚴なる葬儀を執行すべし」とある。従って大正五年に掲載することはできない。死去が一月ならば一月号に掲載するのは不可能である。四月以降では卒業しているので茨木中学生ではなく一高生でいたならその号の「団欒」を愛知の古書店で見つけた。

発見された最初の作文は「師の柩を肩にして」ではなく「生徒の肩に柩をのせて」（「団欒」大正六年三月）という題であった。続く「倉木先生の葬式」（「キング」昭和二年三月）と「師の棺を肩に」（「東光少年」昭和二十四年六月）に加えて「師の柩を肩にした者」（「会報」昭和七年十二月）という寄稿を含めると生涯四回も執筆したことになる。何度も振り返るという意味では「十六歳の日記」と同じである。「十六歳の日記」は大正三年五月に書かれたものという設定で、それを大正十四年に二十七歳の「私」が世に出すという形を取っている。その後五十歳になり新しい日記が二枚見つかったとして昭和二十三年にもう一度あとがきをつけて出している。この作品が川端の自伝的著作と言われるのには、祖父の死を契機に天涯孤独になってしまう点が一致するからである。「十六歳の日記」の中では「学校は私の楽園である。学校は私の楽園——この言葉はこの頃の私の家庭の状態を最も適切に

現はしてゐはしまいか」とあるが学校に関してはそれ以上に言及されていない。川端は直系親族が絶えた後に親戚宅を経て茨木中学校の寄宿舎に入っている。当時の茨木中学校が家族を意識していたのならば、多感な時期の川端にとって親のように慕っていた倉崎の死は、肉親の死を実感したもう一つの出来事と言っても過言ではない。

・前代未聞の生徒葬

「生徒の肩に柩をのせて」の原稿及び「団欒」は川端家に残っていない。それなのに何度も執筆するのはよほど思い入れがあったのか題材にしたい何かがあったかである。倉崎の死の一年後に、「故倉崎仁一郎先生追悼號」（久敬会「大正七年一月臨時発行会報」）が出されており、葬式の詳細な記録が分かる。川端は正会員なのでこの会報は手にしていた筈であるし、加藤逢吉校長からも再度送られている。恐らくこの会報をもとに後の二つの作品を手掛けたと思われる。

いかにもあの小説は、多くの読者を感激させたにはちがいない。『キング』の記者達は、十年近くの今日まで、いまだにそれを覚えてゐて、ああいふ美談小説をもつと書いてほしいと、しばしば私に求めるほどである。しかしながら、『倉木先生の葬式』の美しさは、事実の美しさであつて、作者の美しさではなかつたのである。いはゆる美風良俗の記事を主眼としてゐる『キング』には、記者たちが血眼になつて捜し廻つても、今の世には二つと得られぬ、ありがたい材料だつたのである。あれを読んで架空の物語だと思つた人が多いかもしれぬ。昔の私塾ならいざ知らず今日の公立の学校で、しかも少年に過ぎぬ中学生達が、師の葬式の労役万端を自発的に行つたなどといふことは、実に世人の夢想だにし得ぬことであらう。（川端康成「師の柩を肩にした者」『会報』第

四八号 久敬会 昭和七年十二月発行）
この時代でも珍しい師弟の逸話だと分かつていてそれをテーマにしている。つまり美しい行いを小説化して残そうとしたのである。

・恩師倉崎仁一郎

倉崎仁一郎は明治元年二月一日に島根県松江市北堀町（小泉八雲の旧居と同じ町）に生まれている。亡くなった時は四十九歳で、五十歳の誕生日まであと二日足りなかった。追悼号の中の倉崎仁一郎は人格者として登場している。寡黙だが生徒の将来を憂慮する仁者であつたようだ。当時の茨木中学校は前述の生徒日誌の他にも学級日誌である教室日誌というものがある。他の学年の教室日誌にも倉崎を親のように慕っていたと書かれるほどである。川端の日記にも度々登場する。

談話会（中略）父母の恩といふのをなるべく朗読的に墜らぬやうに話す 期間約三十分私一人で十分程を余す外皆占領したのであつた 後で倉崎先生（の君が読）（君は）私に対する同情を述べて父母の恩を話すに至つた動機を可として最後に「君は親がなくなつたのはもし生長後から考へると或は幸福であつたかもしれないといふが私はたとへ何時までたつてもそんな時はなからうと思ふ」とかく親を失つた者の弊は我儘に墜り易い事であるから注意して時に自ら反省してみよ」との事であつた（川端康成「当用日記」大正四年三月二日補卷一）

「親がなくなつたのはもし生長後から考へると或は幸福であつたかもしれない」という川端に対して「私はたとへ何時までたつてもそんな時はなからうと思ふ」と伝え、「とかく親を失つた者の弊は我儘に墜り易い事であるから注意して時に自ら反省してみよ」と諫めている。この時の倉崎は三人の子供を立て続けに亡くした経験があつたのでこ

のような親の視点を教えてくれたのだろう。（明治三十八年に次男、明治四十年に三男、四十四年に次女がそれぞれ死去している）川端は日記に何度も書くほど倉崎先生とのことが印象に残っている。

私は唯少しばかり恋愛小説をより多く読むで文学者の名ばかり覚え別に何も天才的の資質もなく孤児なんてう名を利用してから悲しいとか何とかとか感情をいつはつて得意がり将来文学者となつてゆかう等とんでもない考へにとらはれてゐる脳の衰へたあはれな少年ではないか（と思ひます）精霊が何か人生の感激も何も分らないで唯文学だけ覚え勝手な事を云つてゐる国のためにならぬ子供かとも思はれ「ます」てなりません 併し私は今日どんなであらうと唯一條に「人生の」遠い光に向つて一直線にあゆまねばなりません（川端康成「大正四年ノート」補巻一）

孤児の感情に対して強い実感が無いことが分かる。物心つく前に両親が亡くなったことも起因している。「孤児なんてう名を利用してから悲しいとか何とかとか感情をいつはつて得意がり将来文学者となつてゆかう等とんでもない考へにとらはれてゐる脳の衰へたあはれな少年」と反省している。そんな川端に対して倉崎は授業でよく褒めていたようだ。

この前二学期は英語共通試験は欠席したのだから倉崎先生に君があたり乙組の平均点を増してくれるのだつたと云はれ又信用も先生にはあついで早くも胸がおどる 試験紙が分配される先生「今日のは易いから川端位は満点をとるだらうと言はれて増々胸がおどる スーツと一通り書いて直出す 自信あつたのだあとから三つのよく考へ又字引にたよつて三つの誤を発見したのは残念至極である 倉崎先生の幻影が破れるのが恐怖である（川端康成「当用日記」大正五年一月十五日補巻一）

欠席がちであつた川端に対して「君があたり乙組の平均点を増して

くれるのだつたと云はれ又信用も先生にはあついで早くも胸がおどる」と興奮気味に書いている。「今日のは易いから川端位は満点をとるだらうと言はれて増々胸がおどる」寡黙な倉崎から認められて英語に対する意欲も高まつたようで、作文の低得点に対して英語は常に高得点であつた。（五年生では学年平均が七十三点の時に川端は八十八点）

三時間目の体操末藤君と例の通り誤魔化す 四時間目の英語の試験は今日こそは満点と思つたけれど残念ながら長蛇を逸した 倉崎先生の知（過）遇に対しても尚一層の精勤を要する（川端康成「当用日記」大正五年一月二十二日補巻一）

このようにひたすら精進する様子が垣間見れる。日記のこの箇所だけ見ると川端は教師に対してとても素直な生徒だつたように映るが、実は他の箇所には教師に対しての批判が多く見られる。斜に構えた生徒だつたようで気に入らない科目をさぼる常習者でもあつたようだ。そんな中で一人だけ川端が手放しで絶賛しているのがこの倉崎なのだ。「倉崎先生ほど私に感銘の深い教師は一人もなく、倉崎先生に対するほど私がよい生徒であつたことは一度もない」（師の柩を肩にした者）の思いは一周忌の頃の日記にも見られる。

茨木の五年級の人々に送る一高一覧表を三丁目まで買ひに出かけ湯に入つた。秋岡にも先日俊子さんの伝言があつたので義愛さんに去年の古い一覧表を送送した。秋岡ののぞんだのは私の請求する月謝なり会費の正否を見るためなのは明である。倉つさん（倉崎先生の事をかう呼ぶ。）の一週期も近づいた。昨夜も床に入つて色々考へた。兎に角先生はほんとに立派な人格だつた。空想してみると、私が先生の追悼会を首唱して開いたり、お宅を訪ねて師範と小学に行つてゐる娘さんと友達になつたり。小さい娘さんを誰かの手をひいて遊びに行く所を考へたり。遂には結婚するの

に何れを選ばうと思案したり。取りとめもないこと甚だしい。しかし是非会を開くつもりで井上とも話した。(発信) 茨木中学五年級監、倉崎善郎、秋岡義愛、久敬会。(川端康成「当用日記」大正七年一月二十二日補卷一)

注目したいのは「お宅を訪ねて師範と小学に行つてゐる娘さんと友達になつたり。小さい娘さんを誰かの手をひいて遊びに行く所を考へたり。遂には結婚するのに何れを選ばうと思案したり」の箇所である。倉崎には七人の子どもがいたが、三人亡くなつてゐる。長女のシヅ(明治二十八年生)は夫(長谷川清治)の赴任先である岩手の釜石に行き、長男の義郎(明治三十一年生)は茨木中学を卒業した後に東京の通信学校に行き、三女の道(明治三十五年生)は東京女子師範学校に進学していたので、家には妻の寿恵(明治九年生)と尋常小学校に通う四女の敏(明治四十二年生)だけだった。この恋愛対象になつてゐるのは三女と四女である。初恋の人とされる伊藤初代(明治三十九年生)の前に淡い思いを寄せていた存在がいたことが伺える。因みに「発信」欄にある「倉崎善郎」とは倉崎の長男倉崎義郎のことと思われる。当時入院していた義郎に手紙を送つた痕跡がある。義郎もこの時、伊原青々園への手紙に茨木の同窓生から手紙が来たと書いている。

倉崎の葬儀には存命していた妻も大正九年には亡くなつてゐる。この事實は会報を通して久敬会関係者に伝えられたので川端も耳にしたはずだ。川端の孤児をモチーフにした作品は大正末期から昭和初期にかけて集中し、お嬢さんたちが孤児になつた時期と一致している。前述の孤児の感情が希薄だった川端が、お嬢さんたちへの同情を機に孤児の感情が強まつた為だと推測できる。そして戦後の「師の棺を肩に」の時期に孤児モチーフが復活しているのも興味深い事実である。

川端康成に影響を与えた茨木中学校の教師たち

宮崎

二、「団楽」掲載に関わつた教師

・校長の加藤逢吉

加藤逢吉は明治二十八年～大正十年に校長として勤務した人物である。安政四年生まれでこの時は六十歳。科目欄には修身とある。川端康成が一高を受験するときに実力不足だからと止めた人物として知られる。次にあげるのは同級生の証言である。

当時、私と同級の川端康成君が授業中小説ばかり読んでいてあまり正課の授業には力を入れなかつたので、成績はいつも中程度でございました。川端君は一高を受験されたんです。その時に加藤先生は川端君に「おまえの成績ではどうもむずかしい。師範学校くらいがいいのではないか。」と、一高の受験をやめさせるような忠告をされたんです。しかし川端君は、自分に自信があつたのか、先生の忠告に従わずに、一高を受けてみごと合格したんです。

(田村正雄 中一八回 「川端康成君に進学で忠告」『天つ空見よ』)

大阪府立茨木高等学校久敬会 一九九五年十一月二十八日発行)

加藤逢吉は広島藩士族の生まれで、東京大学理学部に入學している。宮城県師範学校(現、宮城教育大学)を経て、島根県師範学校(現、島根大学教育学部)と島根県の松江中学校(現、松江北高校)を兼務した。この時の松江中学校の生徒が倉崎仁一郎である。その後滋賀県尋常師範学校(現、滋賀大学教育学部)に赴任している。この時に所謂大津事件があり、四日後にロシアの海軍士官らが現場に赴いた時の通訳を加藤が担当している。滋賀県商業学校(現、八幡商業高校)を兼務し、高知県尋常中学校(現、高知追手前高校)の教諭となる。その後三十九歳で大阪府立第四尋常中学校(後の茨木中学校)の校長に任命される。赴任後すぐに加藤は倉崎仁一郎を呼び寄せてゐる。

・追悼号の濱田眞名二

濱田眞名二は明治三十一年（大正八年）に地理、歴史、英語の教師として勤務した人物で、倉崎と無二の親友であったようだ。明治八年生まれなのでこの時は四二歳。東洋缶詰の高碓達之助（明治十八年生）に日本は国土が狭いので水産業にこそ活路があると助言した教師として知られる。「故倉崎仁一郎先生追悼號」に「倉崎先生の逝去」と題して実に十四ページに渡る追悼文を記している。この追悼号を川端は読んで、後の「倉木先生の葬式」「師の棺を肩に」の参考になっている。

・校歌の多門力蔵

多門力蔵は明治三十三年（大正十一年）に国語、漢文、修身の教員として勤務している。明治三年生まれでこの時四十五歳。検定により教員になり、茨木中学校の中心的教員であった。明治四十四年に時の皇太子行啓の折には授業を披露している。大宅壮一（明治三十三年生）に影響を与えた人物として知られている。

〈校歌の歌詞〉

天つ空見よ日月も星も。其時違へず其道廻る。我等も各々力行息まず。本務を尽くして天意に副はむ。二、代々の跡見よ何れの国も。勤めて興り奢りて亡ぶ。我等も互に荒怠誠め。至誠を致して国運扶けむ。（校歌「会報」第二十一号 久敬会 明治四五年）

天の動きと人の生き方を重ねているが、後の川端の万物一如思想を彷彿とさせる。この校歌は現在の大阪府立茨木高校でも歌われている。次にあげる易経の影響を強く受けている。

行天健。君子以自彊不息。（易経）／克勤于邦。克儉于家。（書経）（校歌解説「会報」第二十七号 久敬会 大正四年）（『易経』「乾」為天より。『書経』虞書「大禹謨」↓禹・古代夏王朝の初代王。

黄河の治水で知られる。）

四書五経は帝王学、つまりリーダー教育に用いられたようだが、作詞した多門力蔵の言がある。

私は常に学校を家族的にしたいと思つてゐます。尤も学校を家庭的にしうといふ人はいくらもありますが、私のいふのはそれと違ひます。所謂家庭主義は単に学校の内部即ち教師と生徒との間を家庭的にやつてゆかうといふので、卒業生は除外してあるのです。併し学校は工場ではありませんね、卒業生は輩出された製造品とは違ひます。卒業生は学校の生んだ子で、切つても切れぬ肉親であります。私のいふ家族主義は、教師が親たり生徒が子たる外に、在校生は弟として兄たる卒業生を敬慕し、卒業生は兄として――親の手を放れて自活して居る兄として――弟たる在校生に友愛の情を寄せ、且卒業生中の伯たり仲たる人は其の叔たり季たる人を指導し誘掖し相提携して社会に活動するといふ風にしたいといふので、斯うならねば学校教育の本意は徹底されないと私は思ふのです。（多門力蔵「二十周年記念日に遭ひて懐ふ所を陳ぶ」『会報』第二十七号 再掲）

このように一致団結する心の結びつきを重視している。

・学年級会の杉本傳

杉本傳は明治四十四年（昭和十四年）に体操、柔道の教員として勤務している。明治二十二年十月生まれでこの時は二十八歳。ロサンゼルスオリンピック銀メダリストの入江稔夫（明治四十四年生）の恩師として知られている。クロール泳法を日本に広めたことから近代水泳の父とも言われる。

臨時の五年級会は実際体育の時間に行われた。担当の杉本傳教諭の

計らいで場を設けられ、倉崎先生への「報恩」が議題となった。激しく動揺していたことから、当初は中学生では経済的に実現不可能な案も出てきたが、結局葬式時の労役をすべて五年級だけで賄うと決まった。提灯、花輪、旗、棺と担当者を決めて運ぶことが決まる。見ず知らずの他人に担がれるよりは五年間教えた生徒たちに担がれた方がよいだろうという五年級の強い希望だった。提案した生徒たちも、承認した学校関係者や倉崎先生の身内一同も感動したと追悼號や会報の回想に書かれている。五年級の中には強い結束が生まれ、この自主性が周囲の人に感動の波を広げる。

・生徒日誌の天坊幸彦

天坊幸彦は明治三十一年～大正十二年に歴史、修身の教員として勤務している。明治四年生まれでこの時は四十六歳。隠れキリシタンの史料を発見した藤波大超（明治二十七年生）にその存在を示唆した人物として知られている。その他本居宣長が継体天皇稜は太田茶臼山古墳であるとしたのを否定し、今城塚古墳が継体天皇稜であったと論証している。川端が四年生に在籍していた時に村誌筆写をさせており、第二十冊目の「三宅村」と最終冊の「清溪村」の二冊に川端康成の名がある。

「私は修身の一翼として、自己反省の機を作らせる為と、今一つは其習慣を養わせる方法として日誌をつけることをさせた。ところがこれが評判となって、全生徒に日誌をつけさせることが定まり、其為に一定の生徒日誌なるものが作られた。日誌の検閲には其内容により生徒を疑ったり、罰したりしないのを原則として、思うままに記述することを奨励した。それでこれにより生徒の内部事情が明らかになり、又色々参考になることが多かった。読ん

川端康成に影響を与えた茨木中学校の教師たち

宮崎

で行くうちに、観察の鋭いものの日記には屢々人をして苦笑せしめることがあった。こんなことをして、果たして修身の効果があがつたかと問われたら誠に心恥ずかしいものであった。生徒をして邪を避け正に就かしめようとした効果は判らないが、自分の方が生徒のお蔭でそうしたことの多かったことを覚えている。長い間のことであるから、たまには会心のこともある。」（天坊幸彦教諭『六十歩の歩み』創立六十年記念編纂委員会 大阪府立茨木高等学校 昭和三十一年九月）

この生徒日誌が生徒たちに金子薫園の『作歌新辞典』と『日記文練習法』を広め、後に川端は「十六歳の日記」につなげている。

・「団欒」紹介の満井成吉と「団欒」主催の石丸梧平

満井（宮脇・山脇）成吉は明治四十四年～大正十四年に国語、漢文、修身、歴史の教員として勤務している。明治十五年十一月生まれで、この時は三十五歳。川端の授業は担当しておらず、寄宿舎の舎監として接点があったと推察される。川端の作文を石丸梧平に送っている。

石丸梧平（川端康成の文章初掲載の雑誌「団欒」の主筆者）の在籍に関しては茨木中学卒業という情報がありながらも、同窓会名簿に名前が掲載されていなかった。ところが入学願書、成績表、名簿が確認され、二年級の明治三十三年十一月二十四日まで在籍していたことがわかった。明治十九年生まれでこの時は三十一歳。明治三十二年の入学願書には「貞吉長男石丸五平」と記載され、成績もトップクラスであった。組も甲組だが「疾病」を理由に退学している。（「明治三十年六月起 退学除名放校者人名録」「入学願書受附簿」）には「眼病」と記載されており、関係があったものと思われる。「六十歩のあゆみ」には天坊幸彦教諭により、石丸が賢い生徒であり、惜しまれながらの退学

であったことが綴られている。因みに雑誌「団欒」へ川端の文章を投稿した満井成吉教諭とは同級ではなく、満井が一級上の先輩であった。

三、「師の柩を肩にした者」の現物発見

川端康成が大阪府立茨木中学校の同窓会の久敬会へ寄稿したのは昭和七年十二月と昭和三十年十月の二回である。この本文に関しては同校の卒業生でもあった郡恵一により紹介されている。（郡恵一「二つの寄稿―川端康成より茨木中学校同窓会へ―」『川端文学への視界』三 川端康成文学研究会 教育出版センター新社 一九八七年）ただしこの号の目次には記載されておらず、倉崎先生関係の記述は加藤逢吉校長による「倉崎先生の十七回忌に付いて（写真挿入）名誉会長加藤逢吉 二十九頁」だけである。実は川端の原稿が届くのが製本に間に合わず、別紙として挟み込んだ状態で配布されたのだ。久敬会で保管しているこの号にも別紙は挟まれていない。郡氏の死後この現物は遺族により焼却処分されたので、紹介された本文と現物を確認することができなかった。しかし平成二十九年の八月に著者がこの現物を古書店で見つけた。（別紙は会報に糊付けされていた）句読点の校異は認められたが本文はそのままであった。以下がその本文である。

「会報」久敬会 昭和七年二月の別紙紹介

◎師の柩を肩にした者 正会員 川端康成

「倉木先生の葬式」と題する私の小説が、はからずも加藤逢吉先生の御記憶にとどまつてゐたとみえ、倉崎先生の十七回忌に際して、亡き師の思ひ出を書けとのお言葉を、加藤先生からいただいたことは、私の深く恥入るところである。あんな片々なる通俗

短編でも、倉崎先生との御友情をしのぶよすがとして、加藤先生をいくらか慰めたすれば、私達の校長もずるぶんお年を召されたものだ、と、反つて悲しい。

いかにもあの小説は、多くの読者を感激させたにはちがひない。「キング」の記者達は、十年近くの今日まで、いまだにそれを覚えてゐて、ああいふ美談小説をもつと書いてほしいと、しばしば私に求めるほどである。しかしながら、「倉木先生の葬式」の美しさは、事実の美しさであつて、作者の美しさではなかつたのである。いはゆる美風良俗の記事を主眼としてゐる「キング」には、記者達が血眼になつて捜し廻つても、今の世には二つと得られぬ、ありがたい材料だつたのである。あれを読んで架空の物語だと思つた人が多いかもしれぬ。昔の私塾ならいざ知らず今日の公立の学校で、しかも年少に過ぎぬ中学生達が、師の葬式の労役万端を自発的に行つたなどといふことは、実に世人の夢想だにし得ぬことであらう。

倉崎先生の葬式については、私がまだ茨木の寄宿舎にゐた頃にも一度書いたことがある。今は「人生創造」社を主宰してゐる石丸梧平氏が、当時は大阪で「団欒」といふ雑誌を発刊してゐた。私は倉崎先生の葬式前後の感傷を綴つて石丸氏に送つた。幼い哀傷調の長文であつたため、石丸氏によつて縮められたが、だいたいの原文を生かして「団欒」誌上に紹介された。「師の柩を肩にして」とは、石丸氏が選んでくれた題名であつた。私の文章が雑誌に掲載された最初であつた。

石丸氏は豊能郡熊野田村の産、茨木中学にも縁があり、当時教鞭をとつてゐられた満井成吉先生の知人でもあつたやうだが「団欒」の口絵に葬式の写真をかけてまで、一中学生の投書を麗々しく紹介してくれたのは、私の文章の美しさのためではなく、私

達五年級の行の美しさが、石丸氏の感激させたゆゑであることはいふまでもない

ついでにもう一つ恥しい思ひ出を書けば、その頃茨木町から週刊か月刊かの「京阪新聞」といふ小新聞が刊行されてゐて、私はいろいろな変名で子供らしいものを書いてゐたが、倉崎先生の学識の深さを、はじめて私に語ってくれたのは、その社の主筆であつた。彼は確か英文科出の文学士であつたと記憶する。倉崎先生と沙翁の戯曲を語り、日本の古典を談じたらしく、小さい町に不平ながら赴任し、いまだ年若く、なにを田舎教師がと氣負つた風の彼は、今にして思へば滑稽だが、倉崎先生の諸学、殊に英語学の造詣には、心から驚いた口振りであつた。

その主筆は、比較的私を大人扱ひにしてくれたからこそ、さういふ話もしてくれたので、ただその一事で私の記憶にも残つてゐるのだが、今更ことわるまでもなく、倉崎先生の人格ならびに学識は、少年の私達には分からうはずがなかつたのである。ただし、少年の心にもおぼろげながら感じられてゐたそれが、先生の死に際して純情の結晶となり、あの葬式のやうな形に現れたとは、云ふを許されてもよいだらう。

今夜も、加藤逢吉先生が遙々お送り下さつた、久敬會報の「故倉崎仁一郎先生追悼号」を読み耽つてゐると、夜冷えは膝を刺すにもかかはらず、先師への思慕に胸温まるを覚え、既に隅田川から川蒸汽の音が聞えて来た。倉崎先生の御遺骸を長田の火葬場に運び、いよいよ最後のお別れをして学校に帰つた。あの野道の朝寒が、今も身に新たなる思ひをする。私達の胸や手には、火葬場で杉本傳先生から分ち与へられた、花輪の花が一輪づつあつた。前日は葬式、前夜は東本願寺別院の御通夜、私達は殆んど眠つて

ゐないにかかはらず、今日の学業を怠るのは倉崎先生の意志にもそむくと、やはり自発的に授業を希つた。しかし各時間の先生方は倉崎先生の話ばかりをして下さつた。

そのやうな倉崎先生である。卒業際に先生をうしなつた私達である。先生の柩を肩にした私達である。先生の編纂せられた「二エウ・エデュケーション・リイデア」を、先生自らの最初にして最後の講読で、教はつた私達である。殊に私の長い学校生活で、倉崎先生ほど私に感銘の深い教師は一人もなく、倉崎先生に対するほど私がよい生徒であつたことは一度もない。これはなにも感傷的な誇張ではなく、私の中学時代の成績表によると、英語が一番ましであつたし、高等学校へ進んでからは、いよいよ怠惰な学生となつたからである。そのやうな私の倉崎先生である。にもかかわらず倉崎先生の記念文に、つまらぬ私事を書きつらねたのは、反つて深く先師に頭を垂れての結果に過ぎぬ。

私は久敬會の諸君に、改めて十七年前の「故倉崎仁一郎先生追悼号」を、膝を正して再読せよと勧めたい。少年の日の諸君には、倉崎先生の人格も学識も、正當に理解されやうはずがなかつたからである。私にしても、少年の眼に映じたる倉崎先生の面影を写せとならば、必ずしも文の拙きは嘆かない。しかし、心境のいまだに到らざるを嘆くのである。先生の心境の一端は、遺稿の「漫筆」にも明らかである。名利榮達を度外視し、茨木中学に献身せられてこそ、東方の哲人めいた融通無碍の悟道に遊ばれたので、低俗なる「倉木先生の葬式」を売つて、心ならずも米塩の資をうるわれらの及ぶところでない。いささか先生の墓前に詫びる言葉として、右の如し³。

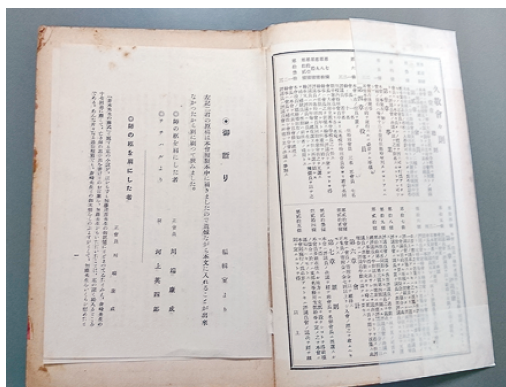


写真1「師の柩を肩にした者」1頁

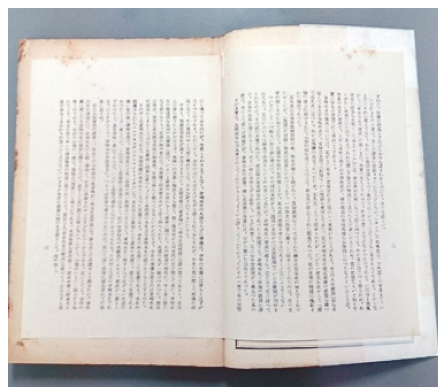


写真2「師の柩を肩にした者」2-3頁

おわりに

以上のように川端の中学校時代を見てきたが、いかに多くの教師の影響を受けてきたかが分かる。現物が発見されなかったことに絡んでこれまで川端の中学校生活が注目されることは無かったが、従来の視点とは違う要素を示唆してくれる資料ばかりである。これまで孤児の感情は川端自身の孤児を軸に書かれていたとされていたが、倉崎仁一郎の娘への同情が起点となっているのは考慮すべき事柄である。加えて初恋という点で言えば伊藤初代に連なる系譜の女性としてこの倉崎家の娘達まで遡る必要がある。

ノーベル賞を夢見ながらも評価されなかった中学生の川端が、倉崎仁一郎の死をきっかけに心の琴線に触れる文章を獲得したのだ。作家誕生の陰に尽力した教師陣がいたということは興味深い逸話である。

（茨城大学教育学部国語教室 平成三〇年八月三十一日受理）

- ¹ 「その老師が晩年『なにぶん軟文学じみていたのでねえ、技巧は拔群だったんだが』と、茨中生時代の康成の事どもを筆者に昔語りしていたことがある。」（郡恵）『康成と壮一』サンケイ新聞生活情報センター 昭和五十七年四月十六日「老師」とは満井成吉のこと。この他年代は特定できないが、久敬会が所蔵する郡恵一の音声データでは「女々しい内容」という表現もある。
- ² 「倉崎仁一郎先生五〇回忌 小笠原利孝先生四十二回忌 昭和四十一年九月二十四日 久敬館」（音声データ）茨木町の評判になっていたという当時小学生だった同窓生の証言がある。
- ³ 川端康成「師の柩を肩にした者」（『会報』久敬会 昭和七年十二月の別紙）写真1・2は同会報に糊付けされた現物の写真である。